O. Willmann の『学問論』

武　安　　宥

I. 学問の宗教的基礎

古代ローマ人は彼等の卓越した洞察力や創造力で，「religio」というラテン語を創出した。この言葉はほとんど全てのヨーロッパの言葉で，例えばドイツ語では「神への信心（Gottesglaube）」，「神への畏敬（Gottesfurcht）」，フランス語では「croire」，「piete」，と人間を神に結び付ける意味を持つ言葉として理解される。古代キリスト教会の最大の教父であり，またカトリック教会の基盤を据え，更にはギリシア哲学的要素の多くをキリスト教思想に継承せしめる媒介者となった聡明で敬虔な聖アウグスティヌスは，「宗教は我々を全能の神に結び付ける（rerigat vos religio omnipotenti Deo）」という。まさしく宗教とはこの「結合力」に他ならない。神はこの「結合力」を「理性的能力」を備えた被造物，即ち，人間に付与したのであるが，この「結合力」は我々人間がその様な「能力」として自ら認知することの出来る「感情」でさえある。

ところで，その「結び付くもの（res in religio）」とは一体何であろうか？

それが強調される必要があろう。即ち，宗教とは「元に還って結び付く（Zurückbindung）」ことに他ならない。宗教において被造物は自己の出所（＝創造主）へ「方向転換」し，我々被造物を宗教（＝創造者）への還帰を呼び掛けている絶対者に結び付くのでなければならない。換言すると，造り主は我に語りて，「汝，何処より来たりて，何処に行くや？。我は汝の行路を引き受け，汝の力の行使を見守るが故に，汝の根源（ἀρχή＝τέλος）を記憶に留め続けよ！」と諭す。またピタゴラス教団の教祖は言う「我々は神に根を下ろし，神

に出身地を持ち，この根源地に確実に踏み留まっていたい。そうでなければ，小川は干乾び植物は腐敗する」と。造られた被造物の人間もまた同様の運命から逃れることは出来ない。その意味で，宗教は人間に埋め込まれた「帰還本能（Heimatsinn）」に他ならない。此の世にあっては誰もが単なる「寄留者」に過ぎない被造物が，旅人として特に外国での旅にあって，眼前に故郷のことが浮かんで来るときに，後ろを振り返って我が故郷を慕うことになるであろう。誰もが物理的な故郷を持っている様に，精神的・霊的な心の故郷を持つ者に幸いあれ！帰り行くべき原点を持つ者に，そしてそこへの郷愁（Heimweg）を持つ者に幸いあれ！彼がそこに踏み留まるのであればなおさらにその者に幸の多からんことを！。

古代ローマ人の「帰還本能」を表現する言葉に「Fides（Treue und Glauben）」があり，この言葉が誠実・忠実を表し，信仰と深く結び付いて一対の言葉として受け止められている。即ち，信仰は誠実，忠実であり，誠実，忠実であることは信心深く，敬虔なことであって，両者は献身的な自律的結び付きに起因する。さらになお三つ目の言葉として同様にローマ的色合いを帯びた言葉，即ち，「pius」があり，これが「敬虔な（pietätsvoll」の意味で，上述の「fides」に立ち帰って理解し直すと，要するに「信心深く，信仰に誠実，忠実に献身する」ことを言うものに他ならない。

宗教が我々人間を神の方へと向き変えることで，宗教はまた我々人間に信仰の上で誠実で変わらないもの，また忠実で敬虔な一切の思いや考えを求め，その様にものとの結び付きを要求する。人間が，元来，神と永遠の故郷に由来しているが故にである。しかも宗教は単に個人的次元での事柄ではなく，また世代間でのそれであり，敬虔な思想は一信者，人間からまた世代へと絶えず受け継がれ，結びの鎖は連綿と引き継がれてゆく。その意味で，宗教には人間の小舟が時代の嵐に翻弄され，押し流されることなく，強固に繋ぎ止められて留まるために錨と綱が供託されている。また宗教は，あらゆる思想に対して，高次な伝統として，到るところで伝承や伝統を尊重しつつも，思想の併存，統合，合一に配慮する。その様な時代的諸現象や諸要求に積極的に対応して行くこと

の出来ることこそが宗教本来の特徴を教示することに他ならない。

ところで，宗教とは元に戻って結び付くことである，と理解されて来たのであるが，ここで学問と宗教との関係を考察して見ると，大方の場合に疑惑・困惑状況に陥りかねない。即ち，端的に言うと，何故に学問は今日宗教から離反してしまっているのか？　という問いである。特に今日の学問が「自由と進歩」を旨として進展してきているだけに，一層その様な学問の宗教からの離反・分離の状況が，由々しい重大な問題として懸念や疑念を惹起する。学問の本質に基づかないで，この様な現象を単に表層的な考察にのみ留める者には，おおよそ「元に振りかえって結び付く」という様な発想それ自体が違和感を生じさせるのであり，彼等にとっては「自由と前進」こそが歓喜に満ちた崇高な標語であり，また目標に他ならない。しかし，それは学問と宗教の本来からするならば，言わば「退歩・退行現象」といわなければならないであろう。

学問研究は全て各世代が積み重ねて来た業績であり，幾世紀をも経て継続的に遂行されてきた探求業績の総成果に他ならない。従って，学問研究は口頭であれ書物であれ，またその他の手段であれ，学説・学理等々の学問的諸成果を伝達・創造して行くことであり，その意味で当然伝統が重視され，それのない所での学問研究は堅固で具体的な基盤を欠くことになる。そのために学頭・巨匠は弟子・学派を必要とし，両者なくして学的根拠を形成し確保することはできない。「学ぶものは信じなければならない」とはアリストテレスの名言である。弟子の学問的業績は先達の業績に学的真理の添加された成果でもある。教師が生徒を批判家として教育する場合でさえも，上述のことは正当なことでありまた生徒の重要な教育目標である。さらに学問研究が自由な学的発展・進展を目指すならば，これまでに経過してきた学的経緯の研究，即ち，歴史的研究のいわば財宝に目を塞ぐことはできない。学問研究は「ヤヌスの首」であり，過去にもまた未来にも視野を向けるのでなければならない。この様な学的要請が全ての学問研究に有効的であったにもかかわらず，それを最大の害悪として排除した不幸な時代が啓蒙主義と理性批判の時代であった。換言すると，それは歴史認識の暗闇の時代であったが，19 世紀の発端で「歴史感覚」が成長し

て来るに連れて，学問研究は再認識を迫られ，全ての認識領域は「歴史的根源」への探求に向かう趨勢の時代を迎えて現代に到っている。学問研究はすべて「歴史的考察」を伴って成されるべきで，所謂「歴史的貧困」に陥ってはならない。正当な歴史的認識の復権とそれに基づく全ての学問研究は，また「敬虔（Pietät）」や「誠実な思考（treues Gedanken）」に就いての考察を含めて，上述と同様なことが言い得るであろう。

以上のことより，学問研究の活動が「宗教」を基盤にして行われる，と言う主張もまた必然的に正当性を帯びてくるであろう。それは単に全ての学問研究だけでなく，また芸術，道徳も同様で，宗教が本質的な意義を有しているからである。即ち，なるほど有限な人間にとって，衝動，欲求，困窮，生存競争等々が，「人類の教師」と成ることを承知するにしても，それだけでは人間精神の高度な活動には十分な納得のゆく説明にはなりえず，むしろそれらの諸現象は単に精神の高次な活動のいわば「敷居」にまで導く契機に過ぎないことを見落としてはならない。

また学問と「宗教」の関係は，古来より自然環境や人間生活一般との密接な関係と連動して考察される必要がある。例えば，建築学の発生，成立は人間が自らの生活と安全を外敵からまた自然の脅威から防御・保護する欲求に由来し，また神殿・寺院等の聖なる建造物の構築に際して用いられる石材や木材等々と共に，そこに見出される建築様式（Baukunst）の名称が誕生する。さらに音楽芸術の発生が「遊戯衝動（Spieltrieb）」にあり，楽器の発明・創意工夫・改良を必然としつつ，キリスト教に関して言うならば，その宗教音楽は「祈祷（oratio）」と共に，大規模な鳴管を持つオルガンや荘重な音色の鈴を持つ鐘を生み出し，それはまた音楽芸術としても広く一般文化に貢献するところは大きかった。民謡，神話，伝説・伝承等々が，言語で創作する文学活動と大いに関係していることはいうまでもないが，他方で自然現象から受ける好・悪の諸印象とまた社会的諸要求との緊密な関係を考慮・反省してみると，一般民衆が文学との関係を持つ契機は，まさしく聖なる知見や聖なる歌謡や聖なる儀式等々と関係する知識を記録することにあるといえるであろう。

学問研究の発端が上述の様であり，またその研究がことごとく「宗教的性格（einer sakralen Charakter）」を帯びてもいたのであったが，さらにその観点から考察を継続してみると，例えば，「文法（Grammatik）」成立の起源は，信仰上の文献・資料の解説や説明の必要にあり，また供物を捧げる場所やその方角の計測，祭壇の設置，日時の設定等々は，祈祷の宗教的営為に「数学的訓練」を必然的に招致することになる。この「数学的訓練」それ自体が既に厳密で精確な特徴を帯びているものとして，「religiositäs（＝宗教心，敬虔）」に，またこの宗教心は「religiosus（＝良心的な，敬虔な）」に連結していて，「数学的」であることは同時に「宗教的」，「良心的」であらねばならないことが判明する。最古の「博物学」が象形文字学であったのは最古の「星学」が天文学であったのと同様である。「法学」や「歴史」もまた元来は神殿・聖堂・教会・寺院等々宗教関係の諸施設に関係する学問に他ならなかった。この様な事態はギリシア，ローマの一部に限らず，インド，エジプトにおいてもまた同様であった。キリスト教的学問の基礎付けも同様なあり方の繰り返しを通して行われた。即ち，キリスト教的真理を教授するために，その教授内容はそれ以前の内容を受容したりまたそれらの内容と同化したりしつつ，自らの教授内容を構成し，専門化して行った。

ところで，前世紀の反宗教的雰囲気が 19 世紀の発端から大いに反省を促され，人間性本来の宗教への憧憬が呼び戻され，学問に対する宗教の根本的意義が当時の歴史認識の有力な創始者によって強調された。即ち，歴史的法律学派の先駆者であるカール・フォン・ザヴィニー（Friedrich Karl von Savigny, 1779−1861），また文法学の父であるグリム兄弟（Jakob, Grimm, 1785−1863, Wilhelm, 1786−1859），さらにドイツにインドの英知を解いて，歴史的比較言語研究，文学研究に着手していたフリードリヒ・フォン・シュレーゲル（Friedrich von Schlegel, 1772−1829, August Wilhelm von, 1767−1845）等が，この様な状況の代表者であった。彼等に共通に内在して躍動していた特徴は，「神への畏敬であり，信仰心に富んだ英知」に他ならない。

歴史を軽視する学問が学問とは言われないが，また宗教的要素の価値を認め

ることなくしては「歴史的理解」もまた成立しえなくなる。この宗教的価値評価は，言うまでもなく宗教的要素と「内的に触れあって生じる感情」を伴って初めて可能になる。この様にして真実なる学問は，自己の自由な発展・展開力を損なわれることなく，信仰心に富んだ理解・認識を可能にする「敬虔（Pietät）」を要求する。またこの「敬虔」こそが宗教と合致する「根本の情緒的態度」に他ならない。

全ての学問が歴史的性格を有していた様に，学問の「有機的特徴」に注目すると，必然的に「宗教」もまた学問的視野の外側にあってはならないであろう。学問はまさしく「統一的有機体」であり，個別の学問はその有機体の一分子で，いわば大樹の一枝に過ぎず，知識の小枝の探求，論及が展開されているに過ぎない。しかし，この大樹の根幹は，元来，宗教的知識である。従って，最初の知者は神と神事に精通したそれらの通告者であった。彼等の知的後継者が「賢者」として，いわば「来世より現世」に下って，現実に法律家，作家として活躍した。古代人は英知を「神と人間に関する事と原因全般の知識」であると説明したが，「哲学者」とはまさしくその「英知を愛する者」に他ならず，彼等が「賢者」の知的・精神的後継者であった。その第一人者はピタゴラス（Pytagoras，B.C. 6 世紀）で，彼は「英知は神からのみ到来する」と，また「人間はその英知全般の友となるべきである」と主張したのであるから，その様な哲学者として呼称される根拠があった。古代ギリシヤ最大の神学者，哲学者であったプラトンもまた「宗教的根拠」を堅持して，「学問への第一歩が神に敬意を払うことにある」と強調したのであるから，彼もまた上記の様な尊称を奉られて当然であるが，「真理」に関してはプロタゴラスが，「万物の尺度は人間である」と主張して，哲学者は「真理」追求に専念するにしても，一般人は「所得と名誉」に駆りたてられる者としたのに対して，プラトンは「万物の尺度は神である」と強調し，また「知者には真理（ἀλήθεια）以外に他には何も相応しいものはない」との自説を堅持していた。彼にとって「真理」とは，「隠され難いもの，忘れ去られ難いもの」を意味していた。従って精神活動を通して「隠されているもの」をそこから引き出し，真実な思考が確保し続

ける所に「真理」は見出される。

ところで，ギリシヤ人にとって「哲学」とは「英知の総合的学問」に他ならなかった。その為，この学問は多種・多様に分岐した学問や知識の小枝を常に視野に収めて自らの内で統一・総合を成就しなければならない。プラトン学徒のニコラウス，ダマスケヌス（Nikolaus, Damascenus, 468−533）は，「哲学」を「故郷」に喩えて，いわば種々の知的領域を経巡る旅人が，物理的「故郷」を持ち何かの時そこに常に帰る様に，学問的故郷として絶えず立ち帰ることの出来る，また立ち帰って行かなければならない「精神的故郷」に他ならない。

キリスト教世界においてもまた同様な発展・展開が繰り返された。即ち，この世界の頂点には神父，使徒，宣教師がおり，教父や教祖は「賢者」に喩えられ，立法家は絶対者として彼等の立法は，リュクルゴスやソロンのそれににも増して長期間，広範囲に亘って有効的に支配していた。キリスト教の学問は神学と哲学を源泉として，スコラ学徒が発展・展開させて行った。聖トーマス　フォン　アキナス（Thomas von Aquin, Thomaso d'Aquino, 1225/26−74）は，総合的・統一的学問を十分に認識して，自己の『神学大全（*Summa Theologiae*）』を知恵の理念，即ち，「知恵の役目は何か（Quod sit officium sapientis？）」と尋ねて，その解説をもって始めている。既に聖ボナウェントゥラ（Bonaventura, 1221−74）は，その著書『学問の神学への復帰（*De reductione artium ad theologiam*）』において，学問の信仰と英知への分岐を極めて意味深長に詳論している。即ち，彼は「ヤコブの書簡」の聖句を引用して，「すべての善い能力，すべての完全な贈り物は上から，また光の父から下ってくる」と言う。しかし，このキリスト教学が全ての認識・学問の小枝を平等に発展・展開させてはいない。例えば自然科学がその代表であるが，この学問が認識全体の一小枝に過ぎないことを誤認しているからであり，キリスト教学自体は全ての学問・認識のために根本概略・略図を用意している。それにも拘らず学問の中にはこの根本略図の中で自己を見失ったり，誤認したりしている領域がある。その観点でスコラ学の教示に学ぶと，感覚的な物の中に非感覚的な物が，

即ち，現象の中に人間精神に相応しい目的・意図である法則が実在しているが故に，感覚的出来事を理解するに当って，我々の視野領域の中心を正しく形成することが可能である。しかし，我々の認識全体は，神的事物の理解と同時にまたそれを越えた啓示的事物をも把握することが出来ることを最終的な到達点（τέλος）としなければならない。

学問が有機的・統一的性格を喪失しないためには，「歴史」と「根源的統一」へと帰還して行かなければならない。この様な要点を自覚的に把握しておくことが全ての学問・認識の責務であり，またそのためにすべての学問・認識の哲学的・宗教的基盤の必要性が益々明確に強固に意識されるであろう。全ての学問の哲学との緊密な結び付きが益々命の通った交流として実現されるのでなければならないであろう。

ところで，実践哲学は行為する英知の娘と言われるだけに，この哲学のいずれの基本的概念も宗教と決して無縁ではなく，むしろ宗教への配慮なくしては満足ゆく概念規定が不可能である。即ち，その哲学的概念の代表的なものは法律，義務，善意，道徳，自由が挙げられる。ヘラクレイトス（前 475 年頃没）の倫理は，「人間の全ての法律は一つの神によって育成される」と教示している。また中世の賢者の教えに従えば，法律のすべては既に人間の自然本性に組み込まれた「人倫の法律」，「自然の法律（Lex naturalis）」なくしては了解することはできないが，しかし，またこの自然法は自己の補則として「神の法律（Lex divina）」を必要とする。これら三法（『人倫法』，『自然法』，『神法』）は三法間にいかなる齟齬を生じさせてもならない。次いで倫理学は「義務」についても根本的原理を教示して，義務の根本は「被造物の創造主への根源的な結び付き」であり，これなくしては如何なる論及も空虚である。神に反抗して抹消される「義務」は全て単なる「枯枝の残骸」に過ぎない。換言すると，倫理学における義務の問題は，究極的に「義務の履行に際して，最終的権利は一体誰が所有しているか？」の探求に他ならない。道徳を認識，自制，正義と規定するにしても，それらの諸徳の上部には，即ち，正義の上部には「愛」，自制のそれには「平和」，認識のそれには「信仰」が，あたかも家屋の再上部とし

て厳然として位置していること，言い替えると，諸徳は「宗教」によってのみ導かれることを忘却してはならない。その意味で，いかなる自由論もまた「宗教的根拠」を欠くならば，不自由な〈決定論〉と自己支配の原理に基づいた〈自律論〉の間で振り子の様に揺れ動き，結局，混乱した頭脳内で両者は紛糾し癒着して，自然法に即した行為は放縦，我が儘に堕す結果に終わるであろう。換言すると，自由論は「宗教の光」に照らされてのみ光輝を発し得，我々が真に自由・独立であり得るのは，我々の根源が神法にあり，その法に則って創造主の栄光を現すため活動するときであり，命の充実・充足感を得ることができるであろう。

社会倫理とは，哲学を越えて社会共同体，国家共同体，法律へと分岐して行くそれらの領域での社会的絆を取り扱う倫理を言う。この社会倫理が唯一つの絆として，例えば全能の国家にのみ関わっている場合には，絆としてのこの倫理は極めて安穏な有効性を維持し得るが，その様な倫理に満足し得るのは学問的に麻痺した良心のみであろう。既に「家族」と言う社会共同体の内部には，絆の序列・位置関係が社会的絆の原質形として存在している。即ち，家族内での父子関係は，「天にあり地において，全ての父子関係がそれに因んで呼ばれている」，あの父子関係を見挙げることがなければ全く理解できない。使徒が言及している様に，「家の父，国の王，それぞれが他者の財産の担い手として出発点にある」が，キリスト教世界では超国家的財産の担い手は「教会」であり，この社会共同体は「完全な社会（societas perfecta）」としてその他すべての社会共同体の「原形」でもある。この「原形」に基づいて初めて真に国家その他の社会的共同体との関係が理解できるのであって，決してその逆の関係からではない。国家に所属する教会が決して真の「教会」ではない様に，「教会」を避けては真の「国家学」も学問として成立することはできない。

倫理学と同様に，心理学もまた宗教との緊密な関係において豊かな学的成果を挙げ得る。現代の心魂・精神に関わる物理学は，これと同様の倫理学や神学の援助を求める必要に迫られている。心魂の概念が単に生物学的にまた物的一元的に理解されてはならない。例えば，魂の癒し，魂の世話，万人の魂（11

月 2 日，万靈節）の様な領域の存在は，心魂の概念規定には必然的に，その様な領域の存在をまでも視野に収めてなされなければならないことを教示している。全体的視野の欠如は決して学問的考察とは言い難いからである。「霊魂不滅」説は，既に古代ギリシヤのプラトンの高説した「最高価値」である。学問的探求が人間自然本性の宗教的特徴を表示する「上への衝動」,「神とその正義への飢餓」。「活水への渇き」に冷淡であってはならず，そのような傾向・態度は極めて非学問的と言わなければならない。その様な探求者には「内的世界」は遮蔽されていて，あたかも色盲者にとっての可視的世界に喩えられ，その様な宗教的盲人が心理学者の中にも認められることは遺憾なことである。

形而上学は「存在と認識」に関わる学問であると共に，究極的に「御言」に緊密な関連を堅持する学問に他ならない。即ち，私は一体何者であるか？　認識は概念によって整序されているのであるが，形而上学はその概念に接近し得るか？　真理にはどうであろうか？　もし形而上学が真理に接近し得ない場合には，信仰は真理によって信仰であり得ているのであるが，形而上学は真理を排除し得るのであろうか？　形而上学は真実，善，一者の関連について，聖アウグスチヌスの精神が好んで没頭した諸問題について沈黙することができ得るのか？　また「自然哲学や自然学」は目的の概念，部分と全体の概念，目的論を簡単に退け得るのか？　なるほど目的論は神学ではないが，神学なくして理解はできない。哲学史が思想形成の根源を把握できるのは，哲学史がその思想形成を宗教の根源にまで回帰する場合にのみである。全ての哲学体系の頂上には,「神と世界に関する偉大な直観」が存在し，その様な「直観」を完成させたのも哲学体系それ自体に他ならない。この「直観」が「全＝一」を探求する場合には,「観念」は汎神論的で，思索の成果は「一元論的」である。換言すると,「直観」が超世界的神＝創造者と立法者を探求する場合には,「直観」は古典的勝義に表現すると，人格神論的（有神論的）で，思索の成果は理想的（理念的）である。

ところで,「全ての歴史」は，専門的である限り,「宗教的要素」を蔑がしろにできない。ゲーテの言葉もそのことを述べた善い例証の一つであろう。「世

界と人間の歴史のテーマとは，しかも唯一固有の最深の意義を優するテーマとは，信仰者，非信仰者間の紛争，紛糾，不和であり，このテーマの下に全てのものが整序される」。宗教と学問を結合するこの概念の織物を，人間が勝手に分離してしまうことは，あたかも人間の「血管を人為的に桔紮する」ことに等しい。勿論，この技術は医学界では高く評価されている技術なのではあるが，その他の学界の学者の内にもこの技術（結紮と結合）に長けた者がかなりいると考えられる。しかし，彼等の実施しているその「技術」とは，「結合する（religare）」と言うよりも，むしろ「下で，下から縛り付ける（subligare）」それに他ならず，彼等は「生命の体液が何処から流れ来るか」を認識するよりも，むしろ「堅く括る」ことと見做している。

勿論，現代の学問も専門的諸学問の統一と結合を「宗教」に無意識の内に要請している状況がない訳ではない。その代表者に「実証主義（Positivismus）」の元祖であるオギュース，コント（Auguste，Comte，1798−1857）が挙げられるが，彼の「学問階級組織論」では諸学問の組織・体系の頂上に彼独自の宗教を据えている。もっとも彼の組織立てた学問階級組織論は，諸学問の組織化ないしは常に紛糾・闘争・混乱の惹起を予見しつつ理論化が行われたのであった。

宗教は，自らが根源的で自らの対象が最高の統一体であるが故に，学問の根源的統一体のために意味を与えることができる。もっとも精神を宗教へ転回させることは，認識によって媒介されるだけでなく，直観，観照，瞑想によっても可能となる。既に中世の神秘家が精神の三活動の相違を教示している。即ち，cogitatio（＝思考行程），meditatio（＝思考活動），contemplatio（＝直観）である。まず第一の思考行程は成果無しの身軽で自由な単なる運動である。次いで第二の思考活動は問題に結び付いた重要な活動であるだけに成果を見ることができる。そして第三に直観は単刀直入で自由な言わば思考の飛躍として最大の成果を得ることができる。第二と第三を比較して以下の様な喩えで言い替えることができる。即ち，前者の思考活動は「平日の活動」に，また後者の思考の飛躍としての直観は「日曜日の思考」に等しい。農夫は日曜日には

日頃耕作している畑を日々の労作時とは別の気分で遊歩するであろう。学者にとってもまた時々の安息日の静穏な閑暇に，言わば自らの「耕作地」を展望してみることは大切で必要なことであろう。その時彼は，既に聖アウグスチヌスも言及している様に，日頃の自らの行動すべてを「永遠の相の下で（sub specie aeterni）」観相することができるであろう。学問の世界においてもまた，この思考の飛躍としての「直観」は多大な貢献をしている。近代の歴史家，ヤコブ，ブルックハルト（Jacob, Burckhardt, 1818−1897，スイスの美術史家）は，キリスト教の隠者が，「壮絶な歴史的活動」の役割を担って来ていると評価し，それに比して現代人が余りにも主観的人生観に陥って，彼等の活動，行動の大半が浅薄，脆弱であると残念の思いを吐露して，「あの巨人達が荒野で展開した精神的能力を予感することさえままならない」と慨歎しさらに筆を次いで，「確かに現代の精神活動と労働は快適である。その故にこの快適な現代は，中世の教会と学問が共に分かち預かっていた〈あの超越世界の微光〉の養分を吸収しつつ生きて行くことを最も簡単に忘却している」と論じている。

しかし，幸いなことに J．ブルックハルトの主張する様な学者，しかも第一級の学者が現代に皆無ではなく，それだけに彼等の存在と創作活動は統一的で荘厳の趣を備えて燦然と光輝を発している。その様な学者の一人として，現代地理学の創設者，カール，リッター（Carl, Ritter, 1779−1859）がまず挙げられる。彼は以下の様な重大な発言をしている。「全ての学問は，可能な限り厳格に自己限定，自己規定をしているにしても，最深の意味での学問は一つの学問が存在するのみで，その他の学門はその学問に基づいてのみ存在することができるに過ぎない。その一なる学問とは被創造物の創造主への賛歌，祝歌に他ならない。神への直観こそが私の最高・唯一の絶対的学問に他ならない」。また彼と同時代人であった物理学者のミカエル，ファラデー（Michael, Faraday, 1791−1867）は，認識を超越した宗教の立場に関して，同様に学問的に重要な証言を以下の様にしている。「人間の学問的定説に疑義を差し挟むことは新発見の扉を開示することに他ならない。言い換えると，教議論に疑義を抱くことは，他方でその教議論の受け入れを認めようとしないことでもある。換

言すると，神の真理を問題視することは自己の人生を偶然に委ねて犠牲に晒すことに他ならないが，神の真理を確信することは自己の中心が神にあることを実証することである」。また我々が物質と称するものは，彼によると，単に力の中心を言うに過ぎないのであり，世界全体の内には唯一の力が支配し，唯一の意志に奉仕するだけである。この様に広大無辺な強固で荘重な宗教的基盤は，我々の毅然とした態度に一層の勇気と活力を与え，それはまた「思考活動（Meditation）」に従事する「観照（Kontemplation）」能力の強化にも波及して行くものである。この両者の功績は言うまでもなく多大であるが，特に彼等は研究領域を異にしながらも確実な共通の見通しを堅持して，相違する研究領域を結び付ける観点を明確にし，一方が自然科学的にまた同時に歴史的に根拠づけた地理学において，他方が光，熱，電気を同一の自然力に還元する物理学において，多大な学問的功績を挙げたことは特記すべきことである。

さらに，フリードリッヒ，フォン，シュレーゲル（Friedrich, von, Schlegel, 1772−1829，ドイツの詩人，哲学者，言語学者，初期ローマン派理論の代表者。August, von, Schlegel, 1767−1845 の弟）にも言及しておかなければならない。彼は系列言語の相違性に統一的形態化を行い，それが単に彼の詩的感性を通してだけでなく，広く深い視野から遂行されていて，彼の宗教的，直観的特性が如実に反映されていることが理解される。既述のファラデーの特徴でもあった，観察するとは展望することであり，展望するとは支配することでもあり，それは最も自由な運動を可能にした。「私はファラデーの様な探求精神を知らない，彼のそれは全く自由で率直，大胆そのものの探求精神であった」，とはティーンダル（J, Tyndall, 1893 没）の言及である。

宗教が後ろ盾とも，後方での支えともなり，その支援の御蔭で，精神が自由に活動を前進させることができるのも，まさしくこの神慮に富んだ恩寵に他ならない。確かにその恵みが逆の作用を及ぼし，精神の拘束力ともなり得るのではないかとの疑問も生じない訳ではないが，篤信の学者は独断主義者でもまた反知主義者でもなく，彼の精神や心情は十分な閑暇と自由を得，また自己抑制的の上に誠実で，思考活動には忠実であると同時に極めて慎重で，知的蛮賊に

も時代の世俗精神にも左右されることなく，殊に真理を犠牲にすることも知性を断念することも全くもって彼の思慮外のことに他ならない。

上述のことから，真実の学問とは学問の歴史的，有機的特色からして根源に立ち帰える即ち，神と宗教に結び付くことであることが判明する。同様のことからして，結局は学問の倫理・道徳的性格もまた作用していることになる。言い替えると，学問的業績の道徳的究極目的も作用していることが判明する。学問自身以外に学問の目的を是認することは現代人の好むところではなく，彼等にとって学問の最高権威はあくまでも学問それ自身が目的であることにある。これは学問探求者に自問自答を迫る重要な課題に他ならない。一体私は何故にこの研究をするのであろうか？　私の充足感，満足感のためにか？　勿論，自我愛を充足させる享楽的根拠で究極的満足感を覚えることはできない。しかし，私に付与された「能力」，「才能」，即ち，「タラント」を用いて精神的活動に従事し，一定の精神的成果を挙げ得る場合には，いささかなりとも「義務履行」の充足感を覚えることもまた事実であろう。もっともこの言葉，「タラント」は言うまでもなく，聖書（マタイ，25，15−30）に由来して，各自の「タラント」は高次的実在者の御手からの証，即ち，「賜物」である。各自の「タラント」は御意に適った「御技」として成就される。その意味で，各自は自己の「タラント」をもって「神への奉仕者」，「神への助力者」となることが要請されている。それ以上に，宗教的基盤に立ち帰って考えると，それはまさしく「使命」として受容されなければならない。少なくともその様な性格の精神的活動への奉仕・助力はまた，「公共の利益に役立つ行為」としても受容されるであろうからに他ならない。

ところで，現代の学問が国民生活と如何程の接点を堅持しているであろうか？　極めて希薄であるが故に，世情の混乱，腐敗，堕落が全体に瀰満しているかの感を呈しているのではなかろうか？　真理が我々を真に自由にしているであろうか？　真理が果たして命，道，永遠となっているであろうか？　学問がラテン語で表現され，同業組合内に限定されていた遥か中世の時代には事情は異なっていた。教養人もまた一般民衆も宗教的地盤に共存していた。彼等は

全て真理を共有して共に真理の高見に向かって生活を営むことができた。ゲーテが「真理は到るところに浮遊し，調和が働き……真理は鐘楼の鐘の音の様に厳粛に生き生きと空中に波打っている……」と，詩歌に表現した世界が実在していたことは注目に値する。そこでは学問は「民衆」と共に在って勝義の「公共性」を保持していた。学問は「宗教」を媒介にして「民衆」への橋梁となっていた。真理は「教会」の「教理問答」，「図書館」の書籍・蔵書に見出され，大塔，大山岳を眼前にする思いに駆られるにしても，「慰案」を覚え，「命」と「永遠」の世界に憩うことが可能であったろう。

かって，上述の F.v. シュレーゲルもレオナルド・ダ・ヴィンチの言葉でもって自己の生涯と業績に充足感を覚え，幸運の恵みに感謝している。

見よ！人生は終わりであるが，
学芸は始まったばかりである
ローマの女神は丁度いま私に
長く糸を紡ぎださせたところである。

学術研究に従事することは，言わば「自らを燃焼し尽くしてしまうローソクの明かりの様なものであろうか？」，あるいは，「我々は図書館員のごみ，塵の為に研究活動をしているのか」，と自問自答する様な場合でも，「忘れてはならない！主は貴方に善いことをされたのである。主を賛美しなさい！全てのことにおいて感謝しなさい」（詩編，103, 2）との聖句が，「十分です，主よ！（satis est，Dne）」との深い感謝の念を伴って応答し喜びの心情が湧出して来ることであろう。

既にライプチッヒの数学者，ドロビッシユ（M，W，Drobisch，1802−1896）も 90 才の誕生日（1892 年）を迎えて，次の様な心情を吐露している。

我長命を保ち，奮闘せり
多くを紡ぎしものを反物と成りしもの少なし

在りし我を越えて尊敬を賜りし
功労に値する以上に敬意を表されしが
証を示すことのみ可なり
我義務に忠実に勤め来しこと違わずと言えども
正しい小径から逸れた所にて
我謙虚に神の恩寵に望みを託し
慈しむべき父の御手の中に
我安らいと終わりを委ねり

学問研究のみならず，我々の探求，それを可能にする才能，能力，人生の全てが何処に源を持ち，人生の全ての果実・成果が，況んや利子・利息が何処に収められるべきか，と尋ねる時，神の御手（ἀρχή）から御手（τέλος）へと最も善く委ねる時に，我等の全ては平和と光輝に到るであろう。

以上のことより，全ての学問が道徳的究極の目的を帯びていることは，必然的にまた究極の源泉へ回帰することと緊密な関係を維持していることが自明となる。従って，言わば万物のアルファー（ἄλφα）でありオメガー（ὦμέγα）であるこの聖地への回帰こそが，全ての学問の全き目的に他ならない。ところで，ギリシヤ語のロゴス（λόγος）は，神学（Theologie），文献学（Philologie），生物学（Biologie）等々の諸学問を表示する構成要素であるが，この同一の言語はまた他ならない聖徒の中の一人で神学者でもあった聖ヨハネが，神の一人子を特色づけた言葉でもあった。即ち，「かって父から生じ，発せられた最高の言葉（Verbum supernum prodiens, a patro olim exiens）」。（はじめにみ言葉があった。みことばは神とともにあった。みことばは神であった。ヨハネ，1, 1）。

これまでにも「真理はすべてロゴスを通して啓示され，探求によって修得されたものに他ならない」と，教父達は教示してきている。それと言うのも「私が真理であり命であり道である」と一人子は宣明しているからである。そこで異教徒が「真理」について保持しているものは，言わば秘密を秘めた言葉（ロ

ゴス）の義援金であり，言葉を示唆して，言葉が，予言の印や古代人の同盟の掟の様に，「神の到来（adventum Domini）」を告げ知らせている。

その意味で，現代の学問もまたすべて，自らの「真理」は「ロゴス」に回帰することにあり，最高者の口から出てきた叡智が，究極の目的を包括していて，柔和にまた力強く万物に亘って同時的に支配している以上，現代人の我々もまた学問の正道を修得するために，叡智の到来と修得を祈願せずにはおれないであろう。

――文学部教授――